

aiimeguyuu さんの体験記第 5 話です。

どうしていいかわからない私は母に電話した。
どうして邪魔するん。「子供はそんなものよ、できるだけでいいじゃん」
今までどおりしたい私。そんなんじゃないや。
家で悶々とする日々。「何もしなくて子供の世話だけしとけばいいよ。」
といわれ、何もしないでいると、晩御飯がないじゃん。旦那が買ってきた。
おいしいと評判の中華料理。食べると味気ない。こんなものを食べないといけないなんて
情けない。毎日出前取るわけにいかないし、明日は作らないとという恐怖が襲う。
動けない。心配した父が昼休みに毎日電話をくれるようになった。
子供の世話はした。でも自分のご飯は食べてない。食べなくてもいいから世話をしなくていいなら死にた
くなってきた。何にも出来ない自分は何の価値もない人間に思えてきたから。
泣いて慰めてもらって電話を切る。世のお母さんたちは元気に楽しそうに育児してるのに、どうして私だ
けできないんだろう。
毎日電話で泣くのが日課になった。
ある日、母から魚の炊いたのと炊き込みご飯とレトルト食品が送られてきた。
その日のご飯は助かった。でもレトルト食品を使い慣れない私は、抵抗があって使えない。育児の大変な
時期は使えばいいんよ。という母の気遣い。でも私はそれを食事と認めていなかった。だから食事が作れ
ない日が続く。
朝も起きられず旦那が一人で起きて食事をとって会社に行く。「ゆっくりしとき」
晩御飯も思った数の半分もできない。私は何もできないんだ。
死にたい。

(続く)